医事紛争のしおり

「脳外科医マーシュの告白」

岡山県医師会副会長　清水　信義

只今、平成30年７月17日の夜、私のこの手の中に「脳外科医マーシュの告白」という本があります。その本の帯には「赤裸々、痛快！誰もが知っておくべき医療の真実」と銘打っています。

イギリスの脳外科医ヘンリー・マーシュが、手術や診療で遭遇した記憶に残る患者について、それにまつわる話を述べたものです。元外科医の私から見ると、そのようなこともあるな、思い当たるなというような話ですが、やはり社会的には刺激的な物語でしょう。

最初は「外科医の中にある共同墓地」という章ですが、同じような患者さんでも結果がうまくゆく時と、そうでない時があり、結果が良い時は誇らしく振舞うが、手術後半身麻痺が残りこれから一生この外科医を恨んで過ごす患者に、時間がたてばよくなることもあると話すのも同じ自分であり、このような時には共同墓地にまた石を一つ置いた思いがすると述べています。

「息子の水頭症の手術」の章では、自分が研修医の頃、息子が水頭症になり、緊急の処置を受け、その後脳腫瘍の摘出術を受けたが、その手術の時間中、この若いマーシュ医師は不安のため病院中を歩き回り、何かあれば病院を訴えてやると息巻いたそうです。無事、息子は生還したが、後に同じような子供が手術中死亡したことも見てきたので、後年、若い研修医には笑いながら「家族の苦しみは、外科医の苦しみなどと比ではないよ」といえると言う。

「ターニャとの出会いと死」の章では、この高名なイギリスの脳外科医が、頼まれてウクライナに手術に行く話ですが、父は紛争で死亡し、娘のターニャが再度の手術で死亡したとき、母親に私たちのことを覚えておいてくださいと頼まれるが、生活だけでも厳しい状況でさらに機材の乏しい劣悪な医療環境の中での手術が満足でなかったと述べています。

最後に「医師が訴訟を起こされる時」の章を紹介して、医事紛争の本稿を担当したことにいたします。手術は完璧に済み元気に退院した患者が、忙しくしている時に電話をかけてきて、頭が痛いというのでその様なこともあるから様子を見るように伝えたところ、その数日後に開頭部位の感染を悪化させて来院し後遺症が残り、結果訴訟となり、被告となって多大の賠償金を払わされた経験から、電話の相談には乗らないことと、脳外科医は次の角を曲がったらまた惨事が待っているもの、と述べています。